

## I 研究の概要

子どもの心を育てるには、行動規制を伴う児童・生徒指導の領域と教育相談の領域とが必要である。そこで、本研究は、その教育相談の領域における教師の対話技法を主とした実践研究とした。

その効果的な対話技法として、本研究会スーパーバイザーである大草心理臨床・教育相談室主宰、大草正信先生の提唱されている「体験的対話教育法」を用いた。

「体験的対話教育法」とは、教師が、問題を抱えた子どもが持っているマイナスの思いを否定せずに受け止め、子どもがなりたい自分をイメージできるよう、プラスの思いを提示する対話法である。研究会では、大草先生より「体験的対話教育法」に関する講義を受け、研究員が実践した対話記録をもとに「やってみる指導」だけでなく「思ってみる指導」に近づけるようアドバイスを受けた。

各研究員は、研究会や日々の実践を積み重ねながら、対話指導の向上に努めた。また、「体験的対話教育法」を研究員ばかりではなく他の教師にも広く理解を深めてもらうために、実践ワークシートを作成した。

## II 研究テーマについて

本研究は、不登校の問題となっている原因を探り、それを取り除くという考えではなく、あらゆる原因があっても、子どもの中に「なりたい自分」をイメージさせることが大切であると考えた。

例えば、不登校になる子どもは、「行きたくない」「学校が面白くない」「勉強が嫌だ」「先生とあわない」「いじめられる」と思ってしまうと、「でも、やっぱり行こう（やっておこう）」と思えないことが原因といわれる。

「体験的対話教育法」では、このような場合、「行きたくない」「勉強がイヤだ」といった子どものマイナスの思いを否定せずに受け止め、それを思ってもいいことを伝える。しかし、それで終わるのではなく、必ず「でも、やっぱり学校に行きたい」とプラスの期待・願望・理想の思いを提示するのである。

教師は、どうしても子どもに対して、「できる」か「できないか」にとらわれがちであるが、そうではなく、「思い」特に、期待・願望・希望・理想の大切さ

を説いていくことが必要である。

また、今まで、話をしない子どもに対しては、教師は為す術がないと感じていた。しかし、この対応においても「体験的対話教育法」では、教師が一人称台詞表現（子どもたちが普段会話で使っている表現）を使い、望ましい思いを子どもに聞かせてみるとされている。一見、聞いていないように見える子どもたちであるが、必ず教師が伝えた言葉は、子どもたちの意思に拘わらず聞こえている。「聞いてみる」と「思ってみる」ことは、同じ脳内反応であることから、「聞かせてみる」ことは、とても重要である。

登校したいという期待・願望・希望・理想の思いが自然に思えるようになる対話法で子どもと接することが、不登校を未然に防ぎ、また、不登校状態にある児童・生徒の問題解決の糸口になると考え、本テーマとした。



### Ⅲ 研究の実践

#### ① 「体験的対話教育法」研修会

研究員は、大草先生から数多くの面接の体験を伺い、今の子どもたちには、「努力・がんばり」型の対話をする前に、「期待・願望・理想」型の対話をし、未来の理想のイメージが思い描けるようになることが有効であることを学んだ。また、「体験的対話教育法」の理念や具体的な言葉かけをまじえた講義を受け、その理解を深めた。

「体験的対話教育法」は、「どうして」「なぜ」などのストレス原因をできるだけ排除し、理屈で考えさせない。「～になれたらいいな」と願い、それを復唱することにより脳に新しい回路ができることやその回路ができると自然に思ったようになる「思い効果」などについて学んだ。

また、ストレスについては、「どうにかなっていくさ」と思い切れる事が大切で、思い切れると心が静かで穏やかになる事、不登校は「心が新たに育つ」と改善する教育発達のな問題であることも学んだ。

#### ② ロールプレイによる「体験的対話教育法」の研修

各研究員が、教師と不登校状態にある子どもとの両方の立場でロールプレイを行った。教師の声かけによって、子どもの心の中にどのような気持ちが湧いているか、また、どのような声かけをしたほうが良いのか、大草先生のアドバイスを受けながら学習した。特に、ロールプレイで児童・生徒の立場に立った際、心の中で起こった変化を実体験することにより、改めて教師の言葉かけの重要性を感じた。

#### ③ 実践対話記録の分析・検討

各研究員が、課題を抱える児童・生徒との対話記録を持ち寄り、「体験的対話教育法」に適合する対話になっているかを分析・検討した。最初は、どうしても「やってみる指導」に陥りがちで、「思ってみる指導」への転換が困難だった。

しかし、子どもを「何ができないか」について追い込まず、理想のイメージが思い描きやすくなる「聞かせる」対話を意識するようにした。子どものマイナスの気持ちを大切に扱い、その思いはそのままでも良いことを伝え、その後、必ずプラスの思いを提示する対話を心がけた。

#### ④ 実践ワークシートの作成

「体験的対話教育法」の有効性を実感したことから、できるだけ多くの教師に「体験的対話教育法」を敷衍したいと考えた。そこで、初めてこの対話技法

を学ぶ人にとっても理解しやすい実践ワークシートの作成に取り組んだ。

実践ワークシートには、普段の会話の中で子どもがよく口にする言葉や態度を載せ、それぞれの場合における「体験的対話教育法」での言葉かけの例を掲載した。また、教師が、普段の対応と比較し、その違いを感じながら「体験的対話教育法」を体得できるよう、ワークシートに各自が記入する欄を設けるなどの工夫をした。

## IV 研究の成果と課題

「体験的対話教育法」を実践し学習していくと、この対話技法は不登校児童・生徒のみならず、あらゆる問題を抱える子どもとの対話に有効である事がわかった。それは、「体験的対話教育法」が、子どもに「できる」か「できないか」に固執させず、「～になればいいな」と思ってみることの大切さを説いているからである。「思ってみる」ことの大切さを話された子どもは、素直に自分の思いを語るようになる。それは、「やってみる」ことに重きを置いていないため、心持ちが軽くなるからである。その為、子どもが反抗的な態度にでなくなり、自然と、教師と子どもとの関係も良くなっていった。

また、この対話技法には、話をしない子どもにも、教師が一人称台詞表現（子どもが日常使用している表現）を使って、語りかけていく技法が取り入れられている。この技法は、とても難しい。それは、教師の側が、子どもに伝えるイメージを明確に持っていなければ、言葉が続かないからである。しかし、教師が、この技法を知っていれば、ほとんど言葉を発することができない子どもにもメッセージを伝えることができ、自信を持って対応することができるようになった。

研究員が、日々「体験的対話教育法」を実践するなかで、研究員と子どもとの関係や子どもの態度の変化に同僚の教師が気づき、それをきっかけに、子どもとの対話方法について話す機会を持てたことが報告されている。

今まで、教師が、子どもとの対話方法について同僚と話しあうことは、あまりなかったと思うので、そういう機会を作った点では、ひとつの成果である。

また、ただ対話方法について話し合うだけではなく、有効な「体験的対話教育法」を紹介し、学ぶ機会を持ってもらい広げていくことが、今後の課題と考える。